

〈日本のキリスト教史〉

16世紀半ば以降	カトリック教会のイエズス会による宣教 フランシスコ・ザビエルなど
19世紀半ば（開国）以降	プロテスタントの宣教師によるキリスト教の伝道

1. ザビエルによるキリスト教の宣教

- 1542-3年頃に種子島にポルトガル人が初めて到着。日本とヨーロッパの最初の交流。
- 1549年8月15日にフランシスコ・ザビエル一行8人がイエズス会の宣教師として鹿児島に来日。
- ザビエルはナヴァラ公国の出身で、イエズス会の創立者の一人。
- イエズス会の宣教の精神は、「全世界に出て行き、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ16章15節）
- ポルトガル国王ジョアン3世の要請を受け、ザビエルはインド、東南アジアへの宣教へと赴く。
- マラッカ（現在のマレーシアの港湾都市）で日本人のヤジロウ（アンジロウ）に出会ったことがきっかけとなり、日本宣教を決意。
- 鹿児島に上陸したザビエルは1年間その地で宣教活動に従事。
- 約100人が信者になったとされている。
- ヤジロウの勧めに従って、神を「大日」と訳したが、後に大きな問題となる。
- 山口の領主、大内義隆から宣教の許可を得て、伝道活動を始める。
- 500人ほどが洗礼を受け、大きな実りが与えられる。
- ザビエルの日本での働きは2年3か月で、信仰を持つ者700人が与えられた。
- その後、中国への宣教へと向かう。
- ザビエルはイエズス会の総会長であるロヨラに日本宣教の今後について手紙を送った。

日本の地はキリスト教を長く守り続ける信者を「増やす」ためにきわめて適した国ですから、どんなに苦勞しても報いられます。それで、あなたが聖なる徳を備えた人物を日本に派遣して下さるよう、心から望んでおります。なぜなら、インド地方で発見されたすべての国のなかで、日本人だけがきわめて困難な状況のもとでも、信仰を長く持続してゆくことができる国民だからです。

- 中国本土を前にして、彼は病にかかり、志半ばに倒れた。
- 日本滞在の期間は長くありませんでしたが、日本宣教の先駆者として、教会用語の原語使用や現地文化への適応方針を示すなど、その働きは多大であった。

2. ザビエル後の宣教

- ザビエルが日本を去った後、10年ほどは目立った進展が見られなかった。
- その後、急速に宣教は進み、九州や中国、関西を中心に多くの回心者が起こされた。

〈要因〉

- ① 為政者からの宣教の許可
- ② キリシタン大名の協力
- ③ 適応主義による伝道

3. キリスト教入信の動機と信仰内容

- 1580年代の日本のクリスチャン人口は約35万人。当時の日本の人口は2400万人。人口の1.4%程度がクリスチャン。

〈日本人がキリスト教信仰を受け入れた理由〉

- ① 当時の人々が救いを求めた社会的要因（社会情勢の不安定、既存宗教の墮落）があった
- ② 封建制と南蛮貿易

4. 禁教と迫害

① 織田信長

- 信長はキリスト教を保護した。信仰心からではなく、天下統一を目指す上で役立つとの考えから。
- 当時、信長の前に立ちはだかったのは、戦国大名（武田信玄、上杉謙信、毛利元就など）だけでなく、比叡山延暦寺を頂点とする仏教勢力もいた。
- キリスト教は仏教を厳しく批判し、また、鉄砲などを輸入する南蛮貿易もあったので、キリスト教は信長の目から見て利益があると見た。

② 豊臣秀吉

- 秀吉も、天下統一の野望に役立つ限りはキリスト教を最大限に利用するという姿勢。
- しかし、早くからキリスト教に対して警戒心をもち、宣教師たちは日本に対して政治的陰謀を企んでいるのではないかと疑っていた。
- かねてよりキリシタン禁制をうかがっていた秀吉は、九州を平定すると、まずキリシタン大名の中心であった高山右近に棄教を迫った。しかし、高山右近は棄教を拒絶した。
- これに続き、5箇条にわたる「伴天連追放令」を出し、キリシタン国が日本に邪宗をもたらしたと厳しく非難し、また、領主による強制改宗を禁止し、宣教師たちは20日以内に国外退去することが命じた。
- 1596年にサン・フェリペ号事件が起きた。マニラからスペインに向かうスペイン船サン・フェリペ号が暴風のため土佐の浦戸に漂着し、日本側が積荷と船を没収した。それに怒った船員が世界地図を広げてスペインの強さを示し、宣教師の派遣は、日本を侵略するための準備であり、スペインが軍隊を派遣して日本を征服すると言いつつ放った。
- これを聞いて怒った秀吉は、フランシスコ会を中心に弾圧を行った。フランシスコ会の宣教師6人、他20人の日本人（イエズス会士3人、信徒17人、子どもも3人含まれる）計26人が長崎の西坂で磔刑に処せられた。「二十六聖人殉教」として知られる。日本の国家権力によって引き起こされた最初の大がかりな殉教。

③ 徳川家康

- 家康も最初はキリシタンの信仰を黙認。
- キリシタン大名有馬晴信の贈収賄事件（岡本大八事件）をきっかけに、キリシタン弾圧を始める。禁教令は全国に発せられ、徳川幕府はキリシタンを全国から断つべく、徹底したキリシタン禁制策を打ち出す。

〈江戸時代のキリスト教の禁教政策〉

- 1) 宗門改…すべての人々お寺への登録をさせてキリスト教入信を防止させるもの。
- 2) 寺請制度…キリシタンではないことを所属する寺から証明書を出させる制度。3つ目は、

- 3) 訴人褒章制…キリシタンを発見して密告した場合に多額の賞金を与える制度
- 4) 五人組…5人一組にして、その中からキリシタンが出れば、他の者も同罪とする連帯責任の制度。
- 5) 絵踏…キリストやマリアの聖画像を踏ませ、拒絶する場合、拷問にかけられ改宗を強いる
- 6) キリシタン類族改…キリシタンが出たらその家系を5代にまで監視下に置く
- 7) 宗門改役の設置…かつてキリシタンであった井上筑後守を任命し、キリシタンの取締を徹底させた。
- 8) 鎖国の完成…オランダ、中国、朝鮮以外の外国との外交関係を経ち、外からのキリスト教の影響を排除した。

- キリスト教の禁制は、徹底した上からの統制と相互監視と長い鎖国が長く続いたことで、日本人の国民性に少なからぬ影響を及ぼしてきたと考えられる。すなわち、社会で処世していくには、自分が確信するものを貫くことよりも、周りからはみ出ないようにすることであり、自分を主張する者は協調性がないと叩かれるということ。
- このような激しい迫害があってもなお、各地に密かに信仰を守り抜くキリシタンたちがいた。彼らは「隠れキリシタン」と呼ばれた。
- 司牧者が国内からいなくなったのちも、コンフラリヤ（信心会）、すなわち、信徒による牧会、宣教、信仰の維持を目的とした信徒組織があった。
- マリア観音や納戸神を礼拝するなどして何世代にも渡って信仰を維持していった。しかし、神仏習合により、伝統的なキリスト教信仰から外れた面も見られた。